小児科医の独り言

札幌市医師会
宮の沢小池こどもクリニック
小池（こいけ）　明美（あけみ）

なんとなく「小児科医になろうかな」と思い、私の医師生活が始まりました。しかし、実際の医療現場では血管確保や気道確保を自分で迅速に行わなければ､赤ちゃんの命を救えないという現実に直面し､「やっぱり私には無理かな」と諦めかけたこともありました。また、当時は当直明けの翌日も何事もなかったかのように働くのが当たり前の時代で、さらに入院患者さんは原則として自分で毎日診察し、学会などで札幌を留守にする以外は、日曜日も病院に足を運びました。これは小児科医としての“尊厳”だったのかもしれませんが、50歳になった頃､「もう勤務医は私には無理」と思い、札幌市西区に小児科医院を開業いたしました。

それからは自分のペースで仕事を続け、休日当番以外は暦どおりにお休みをいただけるようになりました。そして10年ほど前からは土曜日を休診にし、さらに５年前からは同期の先生に週２日の外来をお願いして、なんとか50年近く小児科医を“楽しみ”ながら続けています。診療に少し余裕ができたからでしょうか、この頃は赤ちゃんがいっそうかわいく思えてきました。

生後１か月くらいになると、赤ちゃんの目には、目の前のものがはっきり見えるようになります。たいていの場合、一番最初に目に映るのはお母さんの姿で、そのお母さんを一生懸命目で追う姿はなんとも愛おしいものです。数か月くらいたつと、赤ちゃんは「目の前にいるのは､大好きなお母さんかな？」とじっと眺めて識別し､「あれ､お母さんじゃない！」とわかった瞬間､「わーん！」と泣き出します。このなんとかわいいこと！　思わず「これがあなたの人生の始まりよ」と､しみじみと眺めてしまいます。

さらに知恵がついて、自分のいる空間も理解するようになると､「ん？　ここはおうちじゃない。変だぞ」とお母さんにしがみつくようになります。そして、予防接種を受けたことのある子などは「ここは痛いところだ」とお母さん（最近はお父さん）にしっかりしがみつき､「帰る、ママ！」と泣き叫ぶようになったりしますが、これもまたなんともかわいいものです。小児科医としては、赤ちゃんが「保護者は自分を守ってくれる存在だ」と認識していると思い、まずは安心して診療にあたります。

そんな大切な赤ちゃんとお母さんやお父さんとの人間関係に、最近では人工的なAIといおうか子育てアプリとかが入り込んできています。「いないいないばあ」は、父や母、祖父母等が顔を隠し、数秒後に手を放し、その顔がぱっと現れると、赤ちゃんは「いなくなったと思ったら、いた！」と大喜びし、親たちはその笑顔を見たくてついつい何回もします。その「いないいないばあ」のアプリなんかあって、赤ちゃんがスマホの画面に笑うんです。確かにかわいいのですが、小児科医としてはとても恐ろしく感じます。スマホの画面の顔を「自分と親しいもの」｢心地よい刺激をくれるもの」と認識しているんです。純粋無垢な赤ちゃんの脳に人間以外の人工物を親しい存在と認識する情報が組み込まれてしまったら、その後の脳の発達はどうなるのでしょうか？　例えば、生まれたばかりの犬の子が猫に育てられると、本来の犬らしい行動が変化し、猫のように高いところに登ったり、猫特有の「伸び」をするようになるようです。だとすると、脳に人間とAIの認識が“キメラ”のように入り込んで発達した赤ちゃんは、手塚治虫さんのロボットのように､「この感情はなんだろう」と悩んだり､「人間になりたい」と思ったりするようなことはないのでしょうか。

大正生まれの母は、ボタンの世界からタッチ画面の世界に移り、ATMの操作もエアコンの使い方もどんどん難しくなっていきました。そして今、私も取扱説明は電話相談ができなくなり、メールでの問い合わせになり、チケットのない飛行機に戸惑いながら生活しています。今年はとうとう後期高齢者の仲間入りです。団塊の世代のしっぽです。介護の人手不足が深刻な中、私の時代には、介護もAIのお世話になるのだろうと、少し恐れています。アップルウォッチのようなものをつけて、画面をタッチすると、私好みの“いい男”のAIが枕元に現れて､「小池さん、おはようございます。今日も血圧は大丈夫ですよ」と言ってくれて毎日が始まるのでしょうか。さらに「小池さん、そろそろどうでしょう」と言われてスイッチオフで「おしまい」――そんな日が来るのかもしれません。考えようによっては、それもスッキリして良いのかもしれません。

でも、人間の中で育ってきた私としては、赤ちゃんには人間として悩み、考え、生きてほしいと願っています。どうか皆さん、赤ちゃんはせめて自我が芽生える３歳くらいまでは、アプリではなく、人の手と目と声で慈しんでいただけませんか。純真無垢な赤ちゃんの笑顔に支えられ、私は50年、小児科医を続けてきました。この“人間の赤ちゃん”の笑顔を、私たちの手でしっかり守りましょう。明日からも、ぎゃんぎゃん泣いている子どもたちを「かわいいな」と思いながら、診療を続けていきたいと思っています。